

子宮腔内照射治療を受ける患者の思い

キーワード：子宮腔内照射・患者の思い・子宮頸がん

1 病棟 4 階西

徳重涼子 浦邊真由美 田辺美香 穠本純恵 吉村久美

I. はじめに

婦人科疾患の患者は、生殖器疾患であるが故に、治療や検査を受ける際に強い羞恥心や恐怖心を抱き、人には言えない悩みを抱えていることが多い。子宮頸がんの治療方法の一つとして、子宮腔内照射治療(以下ラルス治療とする)をA病院では行っている。照射を最後まで施行することは、がんの治癒に重要であり治療効果が高いことから、治療を継続して行くことが大切となる。ラルス治療を受ける患者に対し看護師は、治療前に医師と共に治療説明を行っている。しかし、患者は治療へのイメージが出来ていない状態であり、治療への不安や苦痛で治療を中断した患者もいた。

そこで、患者が抱える思いを把握し、治療への苦痛を取り除くなどの援助を行うことで治療継続できるのではないかと考えた。本研究ではラルス治療を受ける患者の思いを明らかにし、患者が必要としていた看護ケアについて検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 研究対象

A病院産婦人科病棟でラルス治療を1年以内に受けた患者で、以下の条件を満たす者とする。

- 1) 子宮頸がんの治療でラルス治療を受けた患者
- 2) 病名告知を受けている者
- 3) 研究の趣旨・目的が理解でき、研究への同意が得られた者

3. データ収集期間 平成21年8月～10月

4. データ収集方法

対象者の背景を診療録・看護記録より収集した。またインタビューガイドを用い、ラルス治療を受ける中で抱く思い、医療者へ望むことについて、30分程度の半構成的面接を行った。

5. データ分析方法

分析は、逐語録化を行い対象者の回答からラルス治療への思いと思われるキーワードを抽出し、KJ法を用い類似性からカテゴリー化を行った。そしてカテゴリーの関連性を明らかにし図解化した。尚、分析結果の信頼性を保障するために、キーワードの抽出とカテゴリー化は複数の研究者の判断一致を得るまで行った。

III. 倫理的配慮

実施にあたり、当院のIRBの承認を得た上、研究の主旨・方法・守秘義務・研究協力

への任意性及び中断の自由・結果の公表について文章及び口頭で説明し、同意書を用いて研究協力の承諾を得た。

会話内容を録音する際には、対象者の承諾を得て、得られた面接内容は、個人が特定できないよう処理を行った。録音した会話内容や逐語録は研究終了後に破棄した。

IV. 結果

1. 対象者の背景

対象者は10名、平均年齢は56.4歳であった。根治術的放射線療法7名、術後補助療法2名、再発がんに対する局所療法1名であった。(表1)

表1 対象者の背景

症例	年齢(歳)	治療内容	ラルス照射(回)
A	82	根治的放射線療法	6
B	76	根治的放射線療法	4
C	58	根治的放射線療法	2
D	54	根治的放射線療法(同時化学放射線療法)	3
E	51	根治的放射線療法(同時化学放射線療法)	3
F	65	根治的放射線療法(同時化学放射線療法)	3
G	59	根治的放射線療法(同時化学放射線療法)	3
H	33	手術後放射線療法	1
I	45	手術後放射線療法	1
J	41	手術後再発の放射線療法	5

2. ラルス治療を受ける患者の思いについて(表2)

データより作成されたラベルは235枚で、14のサブカテゴリーが抽出された。最終的に【前向きな思い】【治療への苦痛】【疼痛緩和】【情報の補足】【精神的安楽の提供】【第3者の支え】の6つのカテゴリーに分類された。以下カテゴリーは【】、サブカテゴリーは[]、コードは<>、対象者の語りの例は「」で示す。

1) 【前向きな思い】

患者は、治療効果の期待を持ちながら、「治療が終わってほっとした」という[治療後の安堵感]を得るために、「辛くても効果があると思って覚悟して治療を受けた」と、[病気を治したい]という【前向きな思い】を抱いていた。

2) 【治療への苦痛】

患者は、截石位の治療に対し「足を開いたままの状態で何人もの人に見られるのが恥ずかしかった」「人に見られているっていうのが辛かった」など治療による[生殖器疾患特有の羞恥心]を感じていた。また、治療中に膣と子宮腔内へ同時に、器具を出し入れすることが「わかっているけど怖かった」という[治療器具による恐怖心]も感じていた。

また患者は、〈想像以上に長い治療〉時間を感じ、「機械に反射する治療風景をみて

表2 ラルス治療を受ける患者の思い

カテゴリー(ラベル数)	サブカテゴリー(ラベル数)	対象者の語りの一部
【前向きな思い】(36枚)	[病気を治したい](30枚)	「辛くても効果があると思って覚悟して治療を受けた」
	[治療後の安堵感](6枚)	「治療が終わってほっとした」
【治療への苦痛】(42枚)	[生殖器疾患特有の羞恥心] (11枚)	「足を開いたままの状態で何人もの人に見られているのが辛かった」
		「股の間から人の頭や顔が見えるわけよ、とても恥ずかしいよ」
		「人に見られているっていうのが辛かった」
	[治療器具による恐怖心](17枚)	「わかっているけど怖かった」
	[身体的苦痛](14枚)	<想像以上に長い治療> 「聞いていたより治療時間が長く感じた」
		<治療環境> 「機械に反射する治療風景を見てグロテスクだった」
<放射線治療の副作用> 「下痢や痔があったから余計に辛かった」		
<治療中に感じる痛み> 「治療を受けて痛みが強かった」		
【疼痛緩和】(8枚)	[前投薬の効果](2枚)	「治療前に痛み止めをしたからあまり痛くなかった」
	[治療に伴う痛み](6枚)	「痛みは体験した人でないと分からないし個人差があった」
【情報の補足】(83枚)	[治療前説明ではイメージしづらい] (70枚)	<情報不足> 「医師の説明だけでは治療の流れが想像できなかった」 「ラルスという言葉も初めて聞くイメージできなかった」
	[同病者からの情報](13枚)	「面白おかしく言う人や痛みを強調する人もいるから段々と嫌になった」
【精神的安楽の提供】 (20枚)	[自分の思いを表出しづらい] (6枚)	「治療に関する悩みや質問を言い出せなかった」
	[看護師との関わり](14枚)	「毎日顔を合わせるのは看護師さんだから、質問や相談にのって欲しい」 「治療中看護師さんにそばに付き添って欲しい」
【第3者の支え】(46枚)	[医療者の支え](28枚)	「先生がそばに付き添ってくれることで安心できた」
		「入院中不安な時、看護師さんが声をかけて励ましてくれたので心強かった」
	[家族・友人の支え](6枚)	「治療の合間に外泊ができて家族や友人に会えて気分転換になった」
	[同病者の支え](12枚)	「同じ治療を受けている人がいて、話ができて頑張ろうと思った」 「同じ病気の人から聞く話はイメージがしやすかった」

グロテスクだった」と、治療中の自分の姿が機械に反射し見えた〈治療環境〉の苦痛を感じていた。また「下痢や痔があったから余計に辛かった」と〈放射線治療の副作用〉と〈治療中に感じる痛み〉など〔身体的苦痛〕があり、それらが重なり【治療への苦痛】となっていた。

3) 【疼痛緩和】

患者は、「治療する前に痛み止めをしたからあまり痛くなかった」と〔前投薬の効果〕で疼痛を軽減できている者もいたが、「痛みは体験した人でないと分からないし、個人差があると思った」と〔治療に伴う痛み〕を感じる患者もいた。痛みの程度には個人差があり、患者は【疼痛緩和】を求めている。

4) 【情報の補足】

患者は、「医師の説明だけでは治療の流れが想像できなかった」「ラルスという言葉も初めて聞きイメージできなかった」と〔治療前説明ではイメージしづらい〕と感じていた。そのため、患者は治療を受けた患者同士で情報交換を行っていた。

しかし、「面白おかしく言う人や痛みを強調する人もいるから段々と嫌になった」など〔同病者からの情報〕により更に混乱を招き、【情報の補足】を必要としていた。

5) 【精神的安楽の提供】

患者は、医師に対しての遠慮から「治療に関する悩みや質問を言い出せなかった」と、〔自分の思いを表出しづらい〕状態であった。そのため、「毎日顔を合わせるのは、看護師さんだから、質問や相談にのって欲しい」「治療中、看護師さんにそばに付き添って欲しい」と、これまで以上に〔看護師との関わり〕を求め、【精神的安楽の提供】を望んでいた。

6) 【第3者の支え】

患者には、「先生がそばに付き添ってくれることで安心できた」「入院中不安な時、看護師さんや先生が声をかけて励ましてくれたので心強かった」と、〔医療者の支え〕や「治療の合間に外泊できて家族や友人に会えて気分転換になった」と、外泊や面会で家族や友人に会うことで、治療を継続することができており、〔家族・友人の支え〕があった。また、「同じ治療を受けている人と話ができて頑張ろうと思った」と、同病者同士でコミュニケーションを図ることで、〔同病者の支え〕が、お互いに励まし合える存在となり、【第3者の支え】の中で治療を受けていた。

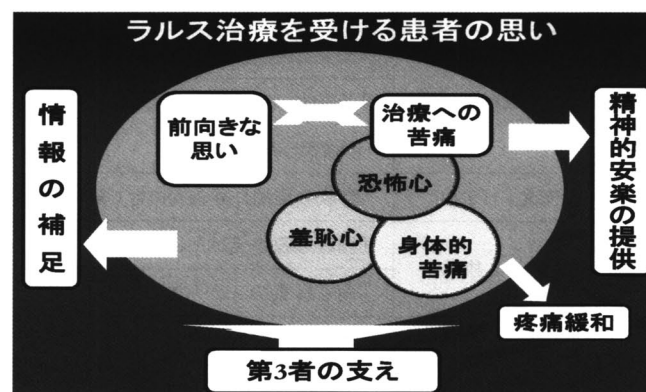


図1 ラルス治療を受ける患者の思い

7) ラルス治療を受ける患者の思いの関連性 (図1)

患者は、【前向きな思い】を持ちながら【治療への苦痛】を感じ、【疼痛緩和】【情報の補足】【精神的安楽の提供】を求めていた。そして、【第3者の支え】により治療を継続していた。

V. 考察

患者は治療を継続していく中で、治癒への希望や有害反応に対する不安など様々な思いを抱えている¹⁾。本研究でも患者は、辛い治療でも自分の「病気を治したい」という【前向きな思い】を抱いていたが、治療による「生殖器疾患特有の羞恥心」や「治療器具による恐怖心」らが「身体的苦痛」と重なり【治療への苦痛】と葛藤しながらも、【第3者の支え】により、治療継続できていた。子宮頸がんには、放射線照射休止によって全治療期間が延長すると治癒率が低下するため、いかに照射を休むことなく治療を完遂するかは、がん治療を左右すると報告されている。今回の研究で、治療への苦痛の中に羞恥心や恐怖心、身体的苦痛に対する思いが想像以上に患者から多くあった。看護師は、治療を中断することをさける為にも、患者の【治療への苦痛】を理解し最小限にしていく必要がある。ラルス治療は、截石位という特殊な体位を長時間保持する必要があるため、治療に伴う痛みや恐怖心を強く感じていた。そのため、患者は必要に応じた【疼痛緩和】や【精神的安楽の提供】を求めていた。身体的ケアに加えて、患者の思いを理解し、治療を完遂するために共に歩み続ける姿勢をもち、関わるのが大切である²⁾。看護師は、現在ラルス治療を受ける患者の看護として、ライナック室との情報交換などの連携が不十分であることや治療後の患者の反応や思いを傾聴する時間が十分に確保できていない状態であった。そのため、主治医や病棟看護師だけでなく、患者を中心に、ライナック治療室のスタッフと連携を取ること、また治療後の患者の思いや苦痛など、患者の反応を理解しアセスメントを行うことで次回の治療へ繋げることが大切である。看護師は、患者の意見を踏まえ、前投薬の使用や露出部分を最小限にし、音楽を流すなど治療環境への配慮を十分に行い、医療者のさりげない声かけや手を握るなどして、患者の思いに寄り添いながら患者と関わる必要がある。患者にとって看護師は一番身近な存在であり、患者自身の言葉にならない思いや不安なことを理解し、共有する姿勢をもつことが大切である。そして、患者に安心感を与えることができるよう、より深い信頼関係を築き、治療継続できるよう支えることで治療を完遂させることができるのではないかと考えられる。

手術や化学療法では一定のイメージがあるものの、放射線治療のイメージ化が難しい³⁾と言われている。本研究において、ラルス治療前に医師と共に行っていた治療内容の説明では、治療する部分のみを絵に描いたり、器具の写真を用いるなど、簡単な説明で終わることが多く、患者が必要としている情報を提供していないことがわかった。患者は、実際に治療を受ける状況を頭に浮かべることができるような説明を求めていた。そのため患者は、ラルス治療のイメージ化ができないことで不安が増強し、同病者より情報を得ていた。しかし、同病者からの情報は正確な情報ばかりではなく、更に患者の治療のイメージを混乱させるものとなっていた。看護師は、患者が抱える不安の原因や疑問の内容を確認し、情報の補足が必要か、医師からの再説明が必要かどうかなどを判断して適切な介入を行う⁴⁾ことが必要である。また、ラルス治療について熟知した上で、視覚的な資料を織り交ぜ、

患者が治療へのイメージがしやすいような【情報の補足】を行う必要がある。治療室への見学やオリエンテーションを行うことで、治療へのイメージが容易となり、恐怖心や不安の軽減につながるのではないかと考えられる。

VI. 結論

1. ラルス治療を受ける患者の思いは6つのカテゴリーに分類された。
2. 患者は、【前向きな思い】と【治療への苦痛】を感じながら、【第3者の支え】があり、治療を受けていた。
3. 看護師は患者が治療を継続していくため、患者の思いを共有し、【疼痛緩和】【情報の補足】【精神的安楽の提供】を行う必要がある。

引用文献

- 1) 赤石三佐代：初めて放射線治療を受ける患者の気持ちとストレス対処行動に関する質的研究，群馬保健学紀要，25，P77-84，2004.
- 2) 唐橋美香，望月美穂：女性生殖器へ照射を受けるがん患者，放射線治療を受けるがんサイバーへの看護ケア，医歯薬出版株式会社，P96-105，2009.
- 3) 4) 藤本美生：患者の治療継続を支えるナースの対応とは②治療決定後・開始後・継続中の患者の不安や落ち込みにどう接し、どうかかわるか？臨床看護，35(13)，P2024-2031，2009.

参考文献

- 1) 喜多みどり，芹沢慈子：ケアに役立つ基礎知識イチから学ぶ放射線治療 ②治療・ケアの基礎知識，臨床看護，35(13)，P1996-2004，2009.